

POLE

第101号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2020.9.1

自宅でご覧になれる ポーランド民族文化

この秋、世界的に有名な、スタニスワフ・ハディナ記念国立民族合唱舞踊団「シロンスク」のプロフェッショナルなダンスを通して、その美しさ、豊かな情緒と色どりで人々を魅了する、ポーランド民族文化をオンラインでお楽しみいただけます。

「シロンスク」は、ポーランド民族文化を伝えるアンバサダーであり、このたび日本の皆様を「インスピレーションあふれる舞踊〜フォークロアから現代へ」プロジェクトにご招待します。

このプロジェクトでは、ポーランドの国民舞踊クラコヴィアクとポロネーズ、シロンスク地方の舞踊トロヤクを学ぶことができます。最もポーランドらしいこれらのダンスのレッスンを、オンラインで受けられる

またとないチャンスです。

舞踊団は、これらを日本中に広め、色どり豊かなポーランド文化を「桜咲く国」の隅々までお届けしたいと思います。

同時に、伝統と現代をつなぐ、バレエ公演“EXODUS”も、オンラインでご覧になれます。東京のポーランド大使館で初演されたあと、日本各地で上演されます。

ぜひ「シロンスク」のポーランド舞踊レッスンをご覧になり、ヨーロッパのダンス文化をご堪能ください。

詳しい情報は追ってお知らせします。お楽しみに。

(ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」)



当企画は、ポーランド文化遺産省の助成を受け、人道の港敦賀ムゼウム、シアターX(カイ)、ポーランド広報文化センターがパートナーとなり、日本フォークダンス連盟、日本・ポーランド民族舞踊友好協会、北海道ポーランド文化協会、Polish Art and Science Mission in Japan、フォーラム・ポーランドのご協力をいただきます。また“EXODUS”はアダム・ミツキェビチ・インスティテュートの国際文化プログラム「ポーランド 100」の一環であり、ポーランド文化遺産省の「(NIEPODLEGŁA 独立) 記念長期プログラム 2017-2022」の助成を受けています。

『POLE』 百号に寄せて

小笠原 正明

協会創設のころ

1987年11月発行の会誌『POLE』創刊号は、ワープロで印刷した紙を短冊型に切り取って台紙に貼り付けて作りました。昔、印刷所で「写真製版」と呼ばれた方法です。ポーランド人は「ポーレ」という言葉に懐かしい響きを感じるようで、名づけ親は



=写真=《第13回例会》吉田勝一さんを囲む会(1991.1.10)
前列左から斎田道子、吉田事務局長、吉田勝一、今村会長、相馬純吉監査委員夫人、小笠原正明のみなさん

当時北大スラブ研究センターの伊東孝之教授です。

その約1カ月前の10月2日に発足した、ポーランド文化協会の創設のいきさつは、北大関係者のことしか知りませんが、工学部に滞在したことがある、ウッチ工科大学学長のジェルシー・クローさんが、工学部の吉田宏教授と、文学部の灰谷慶三教授に強く働きかけて実現したと聞いています。ウッチ在住の吉田勝一さんが、その間を熱心に取り持ったはずです。音楽関係では遠藤道子先生、ほかに「連帯(ソリダールノシチ)」運動に関心をもつ人々の支援もありました。初代会長で、元北大学長の今村成和先生は、はじめ「つくる意味がよくわからない」とおっしゃっていたそうですが、北大クラーク会館で行われた準備会で、協会名に「文化」が入ることを確認された上で「わかった」と会長就任を承諾

されたそうです。重厚で、しかも率直だった、当時の今村先生の姿が思い出されます。

吉田宏先生が事務局長になった関係で、私が「ポーレ」の編集を引き受けましたが、もともと放射線化学が専門の自分には、何のアイデアも浮かばず、毎回編集には苦労しました。次々に新しいアイデアが生まれる、現在の「ポーレ」とは大違いです。それでも 1992 年に函館に転勤するまで続けたのは、ポーランドおよびポーランド人について、忘れがたい経験をしていたからです。

「連帯」運動のポーランドで

1980 年 9 月に、交換教授としてウッチ工科大学に行く少し前から、グダニスク造船所のワレサの活動が注目されていました。ポーランド到着直後に「連帯」が結成され、たちまち百万人を超える組織となりました。共産党政権の下、地下で活動していた多くの組織が一斉に動きだしたようです。政情不安となり、社会は混乱し、共産党政府はグダニスクでの「政労会議」に追い込まれました。

ウッチ工科大の職員組合は、地区の連帯組織の中核だったらしく、私の研究の相棒のストラドフスキー氏はそのリーダーだったので、私は革命組織の裏側（といっても、ポーランド語が分からなかったので、その外見だけ）を垣間見ることができました。いわば「前線司令基地」のようなもので、昼夜を問わず会議が開かれ、屈強な労働者風の人たちが連絡に走り回っていました。

ウッチ滞在中は、町はずれにある大学のゲストハウスで、イラクから来たアリージェという若い女性、リトアニアの織物学者アルフィダス、やや遅れてスコットランドから加わった数学者のデビッド、それに日本人の私という、奇妙な組み合わせで3カ月を過ご

しました。日用品をはじめとして、最後には食料品まで店から姿を消し、買い物のため長い行列に加わったり、社会主義国の企業の非効率さに腹を立てたりしながら、それでも助け合って生活しました。アルフィダスの送別会は、ウッチのオペラハウスで行い、ハンガリー産のコニャックで乾杯しました。

滞在中に、鉄道で東ドイツを経由してミュンヘンに行ったときなど、封鎖中だった国境では自動小銃で武装した兵隊に取り囲まれ、難民扱いを受けました。

ちなみにこの2月に、北海道で最初に新型コロナウイルス感染のピークがきたときに、真っ先に心配したのは「北海道封鎖」です。ヨーロッパではこういう場合には、まず境界を封鎖し、鉄条網を張り、武装した軍隊を配置します。私以外にそういう事態を想像した人は、あまり多くなかったようですが。

それから四十年の月日が流れ、ストラドフスキー氏はいったん投獄され、やがて釈放されましたが、ドイツのアウトバーンで事故死しました。アリージェは、イラクに帰って湾岸戦争とイラク戦争を経験したはずです。アルフィダスは、1991 年のリトアニアの独立宣言のあと、首都ヴィルニウスで「血の日曜日」に遭遇したかも知れません。困難な時代に一緒に過ごした、ポーランド人のステファンとはいまも交流があり、一昨年、彼の長男が北大のラファウさんの研究室にインターン生として滞在しました。

1980 年のポーランドでの生活は短期間でしたが、凝縮された形で当時の世界を体験しました。ポーランドには消滅寸前の本物のヨーロッパを感じさせるものが多く、人々の辛抱強さと親切さは私の故郷の人たちと同じだと思いました。ポーランドから離れられないと思うのはそのような経験によるものです。

(おがさわら・まさあき、副会長・事務局長, 2020.4.13)

ウイルスに
負けない

「ウッジ市日本語スピーチ大会」の試み

吉田 勝一

大阪千里国際高校生たちが、今年2月ウッジの高校を訪問する予定が、突然の新型コロナウイルス感染情報で、1月の早い段階で交流授業中止と決まった。その頃はまだポーランド側は楽観的だったが、感染拡大の波は、あれよあれよという間にヨーロッパ諸国へ広がり、ポーランドで初めての感染者確認は3月4日、ドイツ国境の小都市だった。それから首都ワルシャワのマゾビエツキ県に広がり、南部の炭鉱地帯シロンスク地方に拡大、全地域で

感染者が確認された。

ポーランドの大学は2月後半から後期が始まっていたが、中国、日本はじめ、イタリアなどへの感染拡大を受けて、ウッジ大学は、3月9日から高齢者社会人対象コースを休校、11日から全講義、会議等中止し、大学封鎖措置をとった。寮にいた学生たちは、留学生以外全員帰省し、空いた室の一部は濃厚接触者用の観察保護施設に変わった。



鉄道や航空機の国際便もキャンセルされ、国境が閉鎖された。外出が規制され、薬局、スーパーマーケットなどの商店も、午前 10～12 時は 65 歳以上の者専用、入店人数を制限し、レストランはテイクアウトのみとなり、公共施設が次々と閉鎖された。私は自宅勤務で、臨時便で帰国する留学生への情報提供と意思確認、オンライン授業の準備など、最初の数週間は寝る間もない激務となった。

日本語関係では、3月末に予定のワルシャワの第40回弁論大会、6月大使館主催の日本フェスティバル、7月各国同時開催の日本語能力試験など、さまざまな行事が相次いで中止され、初級学習者を対象に毎年学年末に開催されるウッジ市日本語スピーチ大会も、中止の方向で検討が始まった。

オンライン・スピーチ大会

ところが、コロナウイルスに負けない意気込みを示したい、一堂に会さずに何かできないかと知恵を絞った結果、オンライン開催案にたどり着いた。最初からの計画ではなく、行き詰って生まれたプランで、短期間で準備可能か、不確かな要素が多かったが、若い日本語派遣教師二人の働きで、この状況でこそこできるオンライン大会の実施が決まった。

参加者の出場、発表条件など募集要項は、オンライン参加用に一部基準を作り直し、3分以内の自撮りビデオを、参加者本人が主催者に送ることになった。応募作品の流出・改ざんを防ぐため、クラウド設置、応募者専用アカウント、パスワードなど、事前の確認作業が増えた。ワルシャワの弁論大会のように日本語の文法、運用能力、発表テクニックを競うのではなく、「各自のレベルで日本語発表を楽しむ」という本大会の趣旨から、参加者はそれぞれ緊張の中にも、ビデオの自撮りを楽しんだようだ。

応募ビデオは主催者で一括管理、6月8～14日の間に2ステージに分け、全参加者にオンライン配信、各自コメントシートに感想を記入してもらい、オーディエンス賞を決めた。審査員は、ポーランド内外派遣日本語教師、日本国内にいる今後ポーランドに派遣される、あるいはかつて派遣された日本語教師 16 名に評価をお願いした。評価基準は、正確さ(5)、イントネーション(5)、流ちょうさ(5)、発表熱意(10)、独創性(10)、合計 35 点で、発表者一人の総得点は 560 点満点、大会の趣旨から「発表熱意」と「独創性」を他の項目の倍(10)とした。

このスピーチ大会では、これまでウッジ大学日本人留学生たちのポーランド語スピーチ発表も並行して行い、言葉の交流をしてきた。今回は、日本人留学生は帰国してしまい、オンラインの呼び掛けな

ら、ポーランド国内在住日本人や日本のポーランド語学習者にも呼び掛けたらと話が広がり、北海道ポーランド文化協会にも案内をお願いした。審査は日本語スピーチと同じ条件、同じ日時で日本、ポーランドの専門家3名にオンライン審査をお願いした。

最終的な応募数は、日本語スピーチ 49 名、ポーランド語5名と、過去最多になった。試行錯誤の連続で多くの課題が残ったが、私たちは企画してよかったと評価している。というより、この感染拡大の条件下で、ここまで出来たのは、参加者の皆さんの、パンデミックに負けずに生きていこうとする、ビデオを通じた主張に力を与えられたからだ。

応募作品の中には、パンデミック規制で家族の許に帰れない、学生の今の気持ちを日本語に込めたものや、有効な生活実践の紹介があり、日本語で(ポーランド語で)自分の気持ちを伝え合うことができた。参加者のスピーチをお伝えできないのは残念だが、入賞者氏名と発表テーマを、一部紹介する。オーディエンス賞は参加者投票で選んだ。

【日本語発表部門】

日本センター梅田賞/オーディエンス賞「点滴穿石」 Aleksandra Stasiak (諦めずにコツコツと努力することの大切さー学生、4月から秋田国際教養大留学予定が、コロナ規制で断念、その思いをスピーチに込めた)

ウッジ考古学民族学博物館館長賞「私の趣味」 Izabela Matczak (バイトして買ったミシンで、環境保護を考慮した服飾制作ー学生)ほか

【日本人ポーランド語発表部門】

ウッジ考古学民族学博物館特別賞 Co czułam podczas studiów za granicą 長谷川溪冬(留学して感じたことを発表ーポーランド留学生)

このほか、賞にこそ入らなかったが、どの発表作品も、熱い気持ちが伝わってきた。

その後、ポーランドのコロナウイルス規制は大幅に緩和され、マスク着用義務も入店時のみとなり、平常の日常生活に戻ってきた。それでも7月 31 日現在、コロナウイルス感染者数 657(累計 45,688)、死者7(累計 1,714)と日々感染者が続出、予断は許されない。10月の新年度から、教室で対面授業が行えるか、オンライン授業を継続するか、まだ決定できない状況で、留学生の受け入れ・送り出しは、当面見送りとなっている。

しかしどんな状況でも、日本に関心を持つポーランドの学生たちは、日本語を学ぶ熱意を失わず、その熱意に支えられ、日本語教師スタッフも、この地で教鞭をとり続けている。(よしだ・まさかつ、

ウッジ大学日本学専攻講座主任/(法)梅田良忠 教授記念ポーランド日本教育文化センター代表)

《第95回例会》 二風谷アイヌ文化博物館移動展 in 札幌を終えて

平取町立二風谷アイヌ文化博物館の札幌移動展が、コロナ禍の下で、無事終了しました。

移動展明るく閉会

新井 藤子

〈パネル展〉2020/7/18-26, 入場(記帳)者約100人
 昨秋の同館特別展(2019/10/1-12/3)に基づき、1903年夏に北海道アイヌ民族調査に訪れた、ポーランド人ヴァツワフ・シェロシェフスキ、ブロニスワフ・ピウスツキ、樺太アイヌの通訳千徳太郎治からなる調査団が、平取で行った調査の成果を、平村ペンリウク、ジョン・パッチェラー、野村シバンラムなど、ゆかりの人物らも交えて紹介した。

また、ピウスツキ没後100年イベントの縁をもとに、同調査の成果を現代の視点で読み解き直し、それを今後どのように活かしてゆくかを考えつづけるという同館の方針と、アイヌ資料を通じた海外の博物館との国際交流の進展も伝えている。

昨秋の特別展では、パネル展示のほか、蠟管資料や民具も展示された。平取調査を直接知ることのできる資料は、実際には行政文書や学術・文学書、手記などの文章記録がほとんどだ。アイヌの声を収めた蠟管音声は、レプリカや再生機とともに北大総合博物館に、民具はほぼロシアの博物館に収蔵されている。その中から平取調査で採録・収集されたものを特定することは、未だできない。

そこで二風谷アイヌ文化博物館学芸員の長田佳宏氏は、同調査団採録・収集の資料について、平取資料である可能性を提示する形で展示をした。音声資料では、現在沙流地方で継承されている歌謡との共通点を、何度も細かく聴き取り、似ていると判断した蠟管音声を会場に流した。

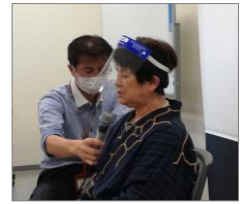
民具については、ロシアと二風谷の資料の形状や文様を丹念に見比べ同定し、非破壊検査や分析により製作技法を割り出し、工芸師・貝澤守氏がマキリの再現製作を試みた。マキリとともにその工程を展示し、再現により知り得た技法を現代の製作に応用するという継承の流れも作った。そのほか、撮影者や年代の異なる風景写真資料とも比較し、当時の平取コタンの区画や、その変容を明らかにした。

パネル展示は、写真のインパクトが強く、アンケート結果(60枚超)にも、当時のアイヌの女性の様子を伝える写真に特に心を動かされたという回答が多い。正装や、装身具をつけたいで立ち、逆に綻びのある服を纏っていても、表情には安心感が漂う。民族学調査という行為にも、ピウスツキが最大限の愛情をアイヌに向けた様子は、間違いなく

写っている。人物らは個性や尊厳を失っていない。

〈講演会〉7/18, 参加者15人

長田氏が、これらの写真の中で身元が明らかになった人物を紹介した。また、二風谷アイヌ語教室の貝澤ユリ子氏と来場者が一緒に神謡を謡ってみるといふ、小さな伝承が実現した。



〈上映会&座談会〉7/24, 参加者約40人

ドキュメンタリー映画を鑑賞。座談会では、井上絃一北大名誉教授=写真右=、森岡健治アイヌ文化博物館長、詩人の花崎皋平氏、『ロウ管の歌』著者・先川信一郎氏=写真左=、太郎治の遠縁の本田和義

・今昇両氏、『トナカイ王』訳者・小山内道子氏、平取町議・井澤敏郎氏、樺太史研究家の尾形芳秀氏、当会運営委員の松山敏氏らから、思い思いのご発言をいただいた。

当初は『熱源』を軸に、史実とフィクションのあり方を語り合う流れだったが、次第に話は蠟管再生秘話など、実際に起こったことに集中した。

映画についても、ピウスツキの調査年代や地域とはかけ離れたアイヌの映像が多用されている、という指摘があった。時を隔てたことで不明になった事柄を表すのに、イメージの力を借り過ぎると、史実とフィクションの境目が曖昧になる。これを断固として否定し、区別する力もあれば、「別にいいじゃん」と受け容れる空気もある。ともあれ会は盛り上がった。

終了後、早くも座談会続編開催へのご要望をいただいた。10月には、千歳高校放送局のみなさんが、ピウスツキを扱った5分の映像を発表されるという。楽しみだ。時間配分でみなさまに大変ご迷惑をお掛けしてしまっただけ、明るく閉会できたことに、心よりお礼を申し上げたい。(あらい・ふじこ)

感銘を受けた映画

先川 信一郎

〈パネル展〉と〈上映会&座談会〉に参加しました。ポーランドファンの一員として、ドキュメンタリー映画「ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄」には、あらためて感銘を受けました。

映画は、ヴァルデマル・チェホフスキ監督が、

2016年に制作したものです。ポーランド人の視点から、ピウスツキの波乱に満ちた生涯に光を当て、樺太アイヌとその文化について、あたたかい眼差しを向けた内容でした。映画の冒頭、ピウスツキの弟ユゼフの曾孫で、民族学者のダヌタ・オニシュキェヴィチさんが、帝政ロシア時代にピウスツキがサハリンに流刑となった経緯や、樺太アイヌやニヴフ、オロッコの人たちとの交流について淡々と語ります。

続いてピウスツキの妹の孫のヴァイトルト・コヴァルスキさんや、歴史学者のクシシトフ・ヤブウォンカさんが登場し、ブロニスワフとユゼフの兄弟の絆、リトアニアでの生い立ち、1887年にサハリンから父に宛てた手紙を紹介し、彼の心情に迫っていきます。そして現在に至り、アダム・ミツキェヴィチ大学のアルフレッド・F・マイェヴィチ名誉教授と井上紘一北大名誉教授が、日本とポーランド両国の学術協力により、ピウスツキ研究が一段と進んだことを明らかにしました。

当時のポーランドは、ロシア、オーストリア、プロイセンの3国に分割され、第一次大戦後までの123年間、世界地図上から消えていました。それゆえに、ポーランド人としてのアイデンティティを持ち続けた、彼の業績を掘り起こそうという、チェホスキ監督の熱い思いが伝わってきました。

この後の座談会では、直木賞受賞作の『熱源』について、活発な意見交換がありました。著者の川越宗一さんは、北海道新聞(2020/7/31)のインタビューで「虚構混じりの小説という手法自体が、事実そのも

のを伝えるには不向きです」、「虚構と事実を等価に扱って、そのテーマに向かって書いていくのが小説なんだろうと思います」と述べています。

私個人は、この小説からは「汗のにおいがしない」という感想を持っています。仮に著者がサハリンの極寒を体験し、ポーランドを訪れ、アイヌの人たちと深く交流していれば、内容はもっと違っていたのではないのでしょうか。

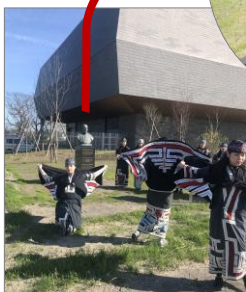
これとは対照的に、アイヌ民族に詳しい哲学者の花崎皋平さん=写真右=の著作『チュサンマとピウスツキとトミの物語 他』(2018)には、ぐいぐいと引き込まれる迫力がありました。鮭やフレップ(野イチゴ)に恵まれ、「何が欲しいとも何が食べたいとも思わずに、ゆったりと過ごす暮らしでした」との記述には、長編詩とともに共感を覚えました。

ところで、会場の様子を千歳高校放送局の女子生徒2人が、取材していました。年配者が多い中で、ポーランド的な表現をするならば、まさに「花が咲いたよう」でした。若い世代が、こういう機会に日本とポーランドを結ぶ歴史を学んでくれることは、嬉しい限りです。

(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授)



↑ 2020/7/30



B・ピウスツキ 102年忌〜ウポポイ National Ainu Museum & Park のピウスツキ像前で、職員がアイヌ古式舞踊を奉納しました。オンカミ(拝礼)のあと「鶴の踊り」と「刀の踊り」を披露しました。(5/15)

ウポポイ (民族共生象徴空間) 開業 ブロニスワフ・ピウスツキ 記念像の再披露



パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使が、白老町旧社台小学校で一時保管中のブロニスワフ・ピウスツキ像を訪問しました。(2/3)

新型コロナウイルス禍で開業が遅れていた、白老町のウポポイが開業しました。(7/12) 開業に先立ち、記念式典が行われました。(7/11) かねて式典参加を希望していた、ポーランド関係者の参加は叶わず、残念。(安藤厚)

=写真提供=駐日ポーランド大使館/野本正博/尾形芳秀/松山敏



『ポーランド・ポズナンの少女たち』 田村和子;スプリスガルト友美 (著)

さまざまな青春の物語

脇 明子

私は 20 年あまり前から、絵本、昔話、物語、知識の本などの「子どもの本」について、さまざまな角度から学ぶ場である「岡山子どもの本の会」を運営しているが、ポーランドの作家マウゴジャタ・ムシエロヴィチの一連の青春小説「イエジツィアード」は、欧米諸国のうちでもなじみの薄い国の物語であるにもかかわらず、仲間のあいだで大人気だし、大学で教えていたときには、学生たちに紹介すると、何人も見事に「はまった」。

このシリーズの魅力は、脇役だった人物が、ほかの作品では主人公をつとめるなど、全体がゆるやかにつながっていること。最初に邦訳されたのは、第5作の『クレスカ 15 歳 冬の終りに』だったが、その主人公が、第9作の『金曜生まれの子』では、三人の子どもをかかえたタフなお母さんになっているし、『金曜日…』の主人公の少女ゲノヴェファには、田舎町の小さな家に住む、昔話に出てくるようなおばあちゃんがいたが、第 10 作の『ナタリヤといらいら男』では、なんとそのおばあちゃんが再婚し、別棟を建てて民宿をはじめようとしている。しかもそのお相手というのが、『金曜日…』の主人公の学校用の務員だった男性で、最初は威嚇的で嫌われていたのだから、とても愉快だ。

まだ邦訳されていないシリーズ第1作が発表されたのは 1977 年だから、東欧諸国がソ連離れをはじめた時期。80 年には自主管理労組「連帯」が結成され、初代議長に選ばれたワレサが日本でも人気を得たが、翌年には逮捕されて、戒厳令が布告されるなど、遠い国の出来事ながら、一喜一憂したものだ。

田村さんによる近刊『ポーランド・ポズナンの少女たち』は、これまでに邦訳されている7作を出来事の順に並べ、当時の社会情勢にも触れつつ、内容紹介したもの。邦訳の発行順は行ったり来たりだったので、もっぱら主人公たちの悩みや喜びに共感しつつ読んでいたが、今度はもっと時代背景に眼を向けながら読み返すのが楽しみだ。



共著者のスプリスガルト友美さんは、ポーランド語を学

んでいて邦訳の『クレスカ…』に出会い、夏休みにポーランドを訪れ、その後、田村さんとの出会いを経て、なんと、ポズナンっ子の男性と結婚された女性。いまや、一連の物語の主な舞台である、ポズナンのイエジツェ地区に住んでおられるそうで、作品によく出てくる場所の写真、おいしそうな食べものの写真をふんだんに添えた、「文学散歩」の章を担当されている。(わき・あきこ、岡山子どもの本の会代表、

ノートルダム清心女子大学名誉教授、『読む力は生きる力』岩波書店ほか児童文学の翻訳多数)

“イエジツィアード”の世界で遊ぼう

スプリスガルト 友美

“イエジツィアード”というポーランド語をご存知でしょうか。これは日本語にすると“イエジツェ物語シリーズ”とでもいえる連作の呼び名です。作者マウゴジャタ・ムシエロヴィチの友人で、シリーズのファンでもあった今は亡きポーランド演劇史の大家、ラシェフスキ教授により、古代ギリシャの長編叙事詩イーリアスのポーランド語名“イリアード”になぞらえて名付けられたとか。

“イエジツィアード”はポーランド西部の商業都市ポズナンにあるイエジツェ町を舞台にした児童文学です。ムシエロヴィチもまた同市出身で、イエジツェ町に住んでいたこともあります。1977 年に第1作が出版されて以来、世代を越えて今日までポーランド中のたくさんの少女たちに愛読されてきました。

長く読み継がれてきた理由の一つは、時の流れとともに登場人物も成長していくことにあるでしょう。各作品は独立しており、主人公の多くはどこにでもいそうな中高生の少女ですが、数年後の別の作品では主人公の母親となっていたり、逆にほんの脇役だった幼い少女が後に高校生の主人公を務めたりすることもあるのです。その中でルーズヴェルト通りに住むボレイコ家の人々だけは、第三作目以降シリーズを通して必ず登場しています。作品によって主人公であったり脇役であったりしますが、常に重要な役割を果たしているのは確かです。

日本では田村和子さんの翻訳で、これまでに7作品が出版されています。この4月に発行された本書は、邦訳各巻に登場する少女たちの成長を田村さんの視点から描いた7章に、2002 年よりイエジツ

ツェ町在住という経験を生かして、私が執筆した文学散歩の章を加えた全8章で構成されています。

最初の7章では、日本の読者には分かりづらい各作品の歴史的背景が説明されているだけでなく、物語のあらすじをたどりながら、所々に田村さんの訳者としての、そして一読者としての想いも散りばめられています。原作はもちろん時代順に発行されてきましたが、邦訳はそうではありませんでした。そのため、既に邦訳作品を読まれている愛読者の方には総集編として、またこれから読んでみたいと考えている方には導入としてぴったりの本ではないでしょうか。

イェジツェ物語文学散歩をテーマにした終章では、作品に登場する風景や、日本の読者の目には珍しく映えると思われる料理の数々を、写真付きで紹介しています。章の終わりには私のおススメの文学散歩コースを収録しました。掲載されている地図を見ながら、実際に歩いている気分を楽しんで頂ければと思います。

私が“イェジツェアード”と出会ったのは、ポーランド語を勉強し始めたばかりの大学1年生の頃でし

た。児童文学に関心を持っていた私に先生が薦めてくださったのが、シリーズの中で邦訳第1作目となった『クレスカ 15歳 冬の終りに』だったのです。戒厳令下に置かれた1980年代のポーランドという、私にとっては未知の世界で展開する物語だったのですが、すぐに引き込まれていきました。

在学中、その素敵な物語を訳された田村さんとお会いする機会も得ました。あれから20年という月日が流れ、遅ればせながらポズナンの大学修士課程に通って2年目だった昨春、後期のある授業のプロジェクトで『イェジツェ物語シリーズ』の文学散歩を作成しました。その話を田村さんにお伝えしたところから今回の本の執筆のお話を頂き、めでたく出版の運びとなったわけです。あの時の出会いがなければ、本書はこの世に出るにはなかったといっても過言ではないでしょう。

イェジツェ物語の中には、ハッピーエンドへとつながるたくさんの出会いが描かれています。本書を案内書として、より多くの日本の読者の方がこの幸せな物語と出会ってもらえるよう願っています。
(すぶりすがると・ともみ、ライター・翻訳家)

角川書店、2020.4

『サガレン～樺太／サハリン 境界を旅する』 梯久美子 (著)

サハリン鉄道の旅

田原 佑子

サハリンを鉄道で旅するというプランは、鉄道ファンなら誰しも旅心を誘われるだろう。日本はかつてサハリンの南半分を「樺太」として領有し、鉄道はその時代に日本が敷設したものである。大の鉄道ファンである著者も、そんな「ノリ」でサハリンへの旅を思い立ったと言う。

本書は二度にわたるサハリン旅行～2017年冬と2018年夏～をまとめた紀行文。といっても、(初めての土地を旅するワクワクした感じが随所に感じられるもの)旅情あふれる旅のエッセイとは異なる。アイヌ、ニヴフ、ウイльтаなどの北方先住民族の土地サハリンが、ロシアの進出に揺れ、さらに極東におけるロシアと日本のせめぎ合いの場へと変貌する状況が、旅の話の中に要領よく盛り込まれている。読みながら、サハリンの歴史に関する断片的な知識が頭の中で整理されてくる思いがする。「ノリ」で出かけた旅ではあるが、「サハリンは、歴史のほうから絶えずこちらに語りかけてくる土地である」と著者は「あとがき」に書く。

第一部は鉄道で行ける最北駅ノグリキまでの冬の旅。その昔、日本時代の樺太を観光した文士た

ちの旅の記録も紹介されている。とりわけ、作家・林芙美子の率直な感想が面白い。1934(昭和9)年に樺太を訪れた林芙美子のすぐれた直感がとらえた風物は、いかにも植民地的で、当時の日本における樺太の位置づけが感じ取れる。

第二部は二度目にサハリンを訪れた夏の旅。日本時代からの線路の軌間(レール間の幅)を拡幅する工事といった現在のサハリン事情を伝えながらも、著者は旅の主題に迫ってゆく。それは1923(大正12)年、宮沢賢治が亡き妹の魂との出会いを樺太の地に求めた、その足跡をたどること。賢治の旅のルートの詳細になぞりながら、『銀河鉄道の夜』をはじめとするこの時期に書かれた多くの詩をてがかりに、著者は賢治の心の行方を追う。妹に寄せる賢治の深い思いと、著者の熱い探求心に、読んでいて引き込まれてしまう。

梯久美子氏のサハリンの旅はまだ終わらない。この地に織りなされた歴史とそこに登場する人々にますます興味をかきたてられ、このあと、さらに三度目の旅に出かけた



という。次は、どんな切り口でサハリンを語ってくれるのだろうか。

梯氏は現在(2020/3/25～)、岩波書店のWEBマガジン「たねをまく」に『天涯の声～プロニスワフ・ピウスツキへの旅』を連載中である。

(たはら・ゆうこ、ウラジーミル・サンギ著『ケヴオングの嫁取り～サハリン・ニヴフの物語』群像社ほかの訳者)

「梯号」に乗って再びサガレンへ

菅原 三栄子

五年前「サハリン国境モニターツアー」に参加。その後日常に戻り記憶も朧げになる中『サガレン』に出会った。

著者梯久美子氏は2006年『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞という快挙をとげ、その後『狂うひと「死の棘」の妻・島尾ミホ』では三賞同時受賞という偉業。(あのミホさんにこんなに迫り粘り強く取材出来たなんて)「この人は凄すぎる！大物だ！」と大ファンになった。であるからして、それと「梯号」に乗り込み再びの旅に出る。出会うは神沢利子、津島佑子、宮沢賢治、チャーホフ、ニヴフなど先住民族。会いたかった人ばかりだ。トイジという古代人や、農業学者ミツリー、鉱山技師ラパーチンも初の出会い。

日々コロナ禍で萎縮の身体と心を解放してくれた。

本作は実に行き届いた書き振りと展開であると一読して感じた。紀行文でありながら文学書でもある。謎が次々出てくる。不思議という大げさではなく楽しげに出てくる。

サハリン号の謎、昔乗った北斗星の謎、ツンドラの謎、林芙美子が国境観光を取り止めた謎…etc. 一つ一つに思い馳せ考察し推理する。人柄の良い「梯号」は焦らしたりせず帰国後古書や諸々の方法でテキパキ早めの謎解き。地図マニア、鉄道ファンを自認の面目躍如の解明も見事である。(「青森挽歌」はどこで書かれたかの謎をいともあっさりと)

しかし簡単に解けぬ謎もある。

第二部「賢治の樺太」をゆく。ここら辺から「梯号」はパワー全開。本領発揮。

一つ目の謎は、賢治の旅はトシの魂の行方を追う旅だったのか。二つ目の謎は白鳥湖に行ったのか行かなかったのか。丁寧に賢治の足跡を追って2017年から三年連続でサガレンを旅し、詩と文章を存分に引用しつつ考察。研究者の論も紹介し、ゆっくり賢治の心象風景に光を当てる。この辺り私は多く語るのはよそうと思う。とてもいい処です。どうか是非本書を手にし、自身で賢治やトシや梯さんを感じ受けとめてほしい。(旅の持つ光と闇をも)

最後に食いしん坊芙美子を買ったというロシアパン。あの白秋もロシアパン屋の家を訪れる話へと続き「樺太のポーランド人たち」の見出しで四頁にわたり協会会員必読の部分が記述されている。ムロチコフスキーを探す著者は、報告集『ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事』(北海道ポーランド文化協会ほか刊)にたどり着き、その中の「樺太のポーランド人たち」で彼を見つけ出した。さすが梯久美子さん。さすがポ文協である。

さあ、読み終えたあなた。書を捨てず旅に出よう。「梯号」に乗って「サガレン」に行こう！

(すがわら・みえこ、詩人)

『熱源』の風をうけて

千徳太郎治の生涯

本田 和義

直木賞受賞『熱源』に、私の曾祖母の弟・千徳太郎治が描かれて、世の中に多少なりともその存在を知って頂けたことは嬉しい限りです。千徳太郎治について、親戚には知ってほしいと思い、資料収集を始めました。今回この機会を頂き、協会の皆様にも千徳の生涯を知って頂けると幸いです。

千徳太郎治は、明治5(1872)年11月13日樺太東海岸栄浜領内淵で誕生しました。父は秋田県鹿角出身の元南部藩士「千徳瀨兵衛」、母は樺太内淵出身の樺太アイヌ「タラトンマ」。

慶應3(1867)年父瀨兵衛は鹿角に幼い長女(私

の曾祖母)と長男を残し箱館へ、翌年には岡本監輔に従い樺太に渡航しました。明治2(1869)年に栄浜詰となり内淵に家屋を建て、この頃タラトンマと知り合い事実上の結婚をしました。この時瀨兵衛32才、タラトンマ16才。明治4(1871)年2月17日女子トク、翌年太郎治が誕生。瀨兵衛は新しい家族が出来たことから、帰農願・樺太内淵永住願を樺太支庁に提出し、秋田県鹿角に残した子供や親族と決別し、樺太に骨を埋めるつもりだったようです。

明治8(1875)年の樺太・千島交換条約により、



瀬兵衛は家族の他タラトシマの母、兄そして親族4名を引き連れて樺太アイヌ八百数十名と共に北海道宗谷に移住、翌年6月に樺太アイヌ 854 名と共に小樽を経由して対雁村へ強制移住となりました。

移住後、父瀬兵衛は明治 13(1880)年2月に対雁・江別両村の初代戸長(首長)となり、太郎治は同年6月対雁学校に入学し、日本語教育を受けました。2年前に入学した山邊安之助は、自著『あいぬ物語』の中で太郎治のことを「字を書くことも、書物を読むこともよく出来て、殊に手紙を書くことなどは至ってじょうずである」と書いています。太郎治の文才を開花させたのは、学校の教育の他、父瀬兵衛の教育がより多く影響を与えたと思われます。

太郎治が対雁学校を卒業した明治 17(1884)年には、父瀬兵衛は現在の江別市街に転居し、明治 20(1887)年過ぎには、太郎治一家は石狩来札へ、瀬兵衛は小樽に転居し、別居状態となっています。この頃、太郎治は樺太アイヌとして生きて行くことを決断したようです。現在も続いている、アイヌに対する差別や偏見により、和人の社会で生活することは、やはり困難であったことは否定できません。

明治 26(1893)年 11 月、太郎治は対雁村の遠藤八右衛門(アイヌ名ハシトエク)三女アエカルシマと結婚し、明治 28(1895)年8月には、父瀬兵衛と別れ、家族と共に樺太に帰島しました(太郎治の姉トクは瀬兵衛の家に残りました)。父瀬兵衛は、明治 20 年頃までに対雁の土地数万坪を売却し、財を成していたようで、太郎治一家の樺太帰島に対し、援助したと思われます。

樺太に帰島後の数年間については、太郎治に関する資料が殆ど無く、どの様な生活をしていたかは不明ですが、先に帰島していた山邊安之助と、連絡を取り合っていたと思われます。

明治 35(1902)年秋から冬に、太郎治に大きな影響を与えた人物、ブロニスワフ・ピウスツキと出会いました。明治 35~36(1902~03)年、太郎治はピウスツキにロシア語を習いながら、識字学校で教師を務めました。明治 36 年 6~9 月に、ポーランドの民族学者シェロシエフスキの北海道アイヌ調査に、通訳としてピウスツキと共に参加し、白老・平取で調査を行いました。明治 36~37(1903~04)年、太郎治はピウスツキと共に、識字学校でロシア語による教育を行い、その中でキリル文字(ロシア語文字)を使用してアイヌ語の文章を記していました。

明治 37(1904)年2月に日露戦争が始まり、明治 37~38(1904~05)年には識字学校は開かれず、太郎治は、内淵を含め六村で、巡回教師として活動しました。この時、巡回教師としてサハリン島知

事より月 12 ルーブル受け取っています。なお、この識字学校の生徒の一人として、明治 22(1889)年生まれの太郎治の弟、政治郎の名前があります。

日本国籍の太郎治は、日露戦争中の立場は微妙で、ロシア軍の通訳をする一方、裏面では日本軍に協力していたようです。明治 38(1905)年4月 20 日付で、太郎治一家はロシア国籍を取得し、戦争終了までの数カ月間は、二重国籍の状態でした。少数民族である樺太アイヌが戦争を生き延びるための、試行錯誤の末の決断だったのででしょうか。

日露戦争後、太郎治は樺太を離れ日本に滞在中のピウスツキにキリル文字によるアイヌ語の手紙を3通送っていますが、ピウスツキが日本を離れた後、二人の接点は途切れた状況となりました。しかし後年太郎治が樺太アイヌの教育者・学者・知識人と評されたのは、ピウスツキのロシア語教育の他、民族学を含めた博物学の教育の賜物と思えます。

太郎治は戦争後、内淵で渡船業にて生計を立てていたようですが、教育に対する熱意は持ち続けており、大正元(1912)年内淵に教育所が開設されると教師として復帰しました。さらにこの時期に内淵の総代も兼任し、民生面でも村に貢献しました。

大正 10(1921)年樺太庁豊原支所 10 カ村にアイヌ集落が集住することになり、内淵の教育所は廃止となり、太郎治は教師を退任しました。この 10 年間に妻アエカルシマが大正2(1913)年5月、母タラトシマが大正 10 年4月に樺太で、姉トクが同年8月に北海道積丹で亡くなりました。太郎治は再婚し、先妻と後妻の子供5人は第二次世界大戦後、樺太から北海道に家族と共に移住しております。

教師を退職した太郎治は、ピウスツキの影響もあり、樺太アイヌの伝統・歴史・語彙などを後世に残すことを考えたようです。昭和4(1929)年8月 10 日、東京の市光堂市川商店より『樺太アイヌ叢話』を出版。これは民族誌・地誌の範疇に入る本で、続けて 10 月にはアイヌ語辞典が出版の予定でしたが、出版されず、その原稿も行方不明のままです。

太郎治は『樺太アイヌ叢話』が出版される 10 日前に急死しました。享年 56 才。

【千徳太郎治樺太栄浜郡栄浜村大字栄浜字北踏辺番外地にて昭和4年7月 31 日午後 9 時 30 分死亡届人山邊清之助(太郎治の弟)】

今後、千徳太郎治や樺太アイヌのこと、樺太の歴史・対雁の強制移住のこと、ピウスツキのことなどを、より多くの人々に知って頂けるよう、微力ですが活動を続けたいと思っております。

(ほんだ・かずよし、樺太アイヌ協会賛助会員)

=写真=千徳太郎治、『樺太アイヌ叢話』より



『日本・ポーランド関係史 1904～1945』（増補改訂版） エヴァ・パウシュルトコフスカ; アンジェイ・タデウシュ・ロメル（著）

待望の新版

尾形 芳秀

本書は柴理子氏の翻訳で、2009年に初版、2019年に増補改訂版が出版された。増補版は、初版と比べて本文で127ページ、資料で13ページも増えている。日・ポ関係を深く知るための、バイブルともいえる書であり、私たちポーランド文化を学ぶものにとっては、待望の新版であろう。



各章の概要

第一章では、1904年以前のポーランドと日本の交流や、日本における最初のポーランド情報について、より詳しく紹介。ロシア統治時代にサハリン島に流刑になったブロニスワフ・ピウスツキや、単騎シベリア横断調査を敢行した福島安正、ポーランド分割と独立運動を取り上げた東海散士らについても、加筆されている。

第二章では、日露戦争前夜の、宇都宮太郎や明石元次郎らの活動を紹介。ポーランドからは、ロマン・ドモフスキとユゼフ・ピウスツキが来日し、日本政府に捕虜解放を要請、ロシア軍の中の同胞兵士を松山捕虜収容所に見舞っている。

第三章では、日本によるポーランド独立の承認（1919）以降、シベリア出兵へのポーランド人の参加、公使館の相互設置、シベリアのポーランド孤児救済、スタニスワフ・パテック特命全権公使の樺太訪問、ポーランドで最初の日本語教師、梅田良忠などが紹介されている。

第四章では、満州国建国や日独伊三国同盟をめぐるポーランドとの関係、ソ連奥地のポーランド人抑留者たちの救援活動、駐日ポーランド大使館廃止のほか、ゼノ修道士、「アウシュビッツの聖者」コルベ神父についても紹介されている。

第五章では、カウナスの杉原千畝領事による「命のビザ」発給の顛末、杉原や、ストックホルム駐在武官小野寺信将軍による、第二次世界大戦中の日・ポの諜報活動協力、開戦後ソフィアに移り朝日新聞嘱託となった、梅田良忠の情報活動などが初版より格段に詳しく紹介されている。

欠落部分と補足

サハリン島時代に流刑になり、日露戦争後に日本領となった樺太に、自ら望んで残留したポーランド人たちのことは、十分に触れられていない。初代駐日公使スタニスワフ・パテックは、樺太に来て同胞人に会い、彼らの長年の念願だった母国のパスポートを交付したが、樺太のポーランド人は、その後も帰国の機会を失い、日本がソ連に敗戦したあと、1948年によくやく大半が母国へと旅立った。

また、ユゼフ・ピウスツキの使者アレクサンデル・ヤンタ=ポウチンスキも、樺太に残された、兄ブロニスワフの妻子の消息を探しに来て、ユゼフからの支援策を伝え、同時に在樺ポーランド人会の歴代リーダーと接触している。

樺太ポーランド人会の初代リーダー、フランツ・チェハンスキは、同胞をコルサコフ監獄の苦境から救うため、未開地の開拓に志願し、「ワルシャワ村」をつくっていた。それが予期せぬ日露戦争に遭遇して、ロシアの悪夢の流刑の島が解体され、彼らは解放されることになった。フランツは、この戦いを冷静に偵察し、樺太に侵攻してきた日本軍と接触し、再度同胞を守ったのである。

一方、ブロニスワフ・ピウスツキが、サハリン島の北部から南部に研究拠点を移したときも、フランツらは陰で支えていた。ブロニスワフは、日露戦争を機にこの島を離れている。

杉原、梅田、小野寺は、ポーランド地下組織から得た、独ソ開戦や、ヤルタ会談におけるソ連の対日参戦の約束など、重要な情報を正確に本国に伝えたが、その情報は活かされなかった。

「シベリアの孤児救済」や「杉原千畝の命のビザ」は、日・ポ友好の証しとして今ではよく知られた話だが、1990年頃までは広く知られてはいなかった。杉原が日本で広く知られるようになったのは彼の死後のことで、政府による名誉回復は1991年に鈴木宗男（当時外務政務次官）によってだった。ポーランドからの情報でようやく彼の功績を追認したということは、誠に恥ずかしい限りであった。杉原はソ連が最も恐れる情報通として知られていたが、日本政府はその情報の価値を理解せず、先の大戦で大きな禍根を残すことになった。

日・ポ間には、対等な立場で無償の交流があっ

たことは、世界史の中でも稀有な例であろう。これには、両国政府ばかりではなく、双方の名もなき人々の貢献が多々あったことは忘れられない。

本書は、ポーランド人学者の労作で、日本には

各論はあっても、このような通説ものはないのは残念である。本書のためには、多くの方々の貴重な情報提供があったことも、記憶しておきたい。

(おがた・よしひで、サハリン・樺太史研究家)

ポーランド・日本美術技術博物館マンガ刊 (絵本) 2019.9 (紙芝居) 2020.5

『遠い遠い東の国で有名になったプロニシ・ピウスツキ』
カタジナ・ノヴァク (文)、パウリナ・パジジェラ (絵)

小さな絵本が紙芝居に 熊谷 敬子

ここ数年、本当に幾多のシーンでこの名を聞いたことだろう。重厚な学術論文や、民間の歴史研究文献、映画、創作詩、エッセイ、直木賞受賞小説はまだ記憶に新しい。私の中ではとうに伝説化したヒーロー、ピウスツキ。

当会でも、継続の誉れ高い“午後のポエジア”をはじめ、ここ数年、彼の関連例会は衰え知らずである。極め付けは、この児童向けの小冊子が、何と紙芝居として製作されましたとのニュース。

白老町のウポポイ開業が、コロナ禍で遅れながらも、ようやくオープンしたというタイミングである。



遠い遠い西の国ポーランドのご縁からの伝達で、皮肉にも道民の私が、近くて近すぎて痛みさえ覚える「アイヌ文化とは」を

受理するのだから、本末転倒の情けなさに、深謝するしかない。

しかしそんな矛盾を清算出来るほど、私のヒーロー、ピウスツキの一人称の語り口と、児童書の持つシンプルさが逆に爽快で、アイヌ女性の象徴を全てチュフサンマに捧げたいほど、二人の物語が清冽に迫るのは不思議である。

ましてや、彼の人生の舞台が紙芝居という枠組で紹介出来るとなったなら、是が非でも私にその歳月をめぐらせて頂きたいと、強気でいう衝動が走る。

ラストのページには、彼の足跡の 29 都市が世界地図のイラストに記載され、近代の旅の過酷さよりも、生き抜いた人間像の大きさが際立つ。

これに触れた子供達は身乗りだして目を輝かせるに違いない。ポーランドの子供達はまっさらな気持ちでアイヌ文化に触れ、染み込ませるであろう。

我が北海道の子供達にも、近い近いサハリンで、遠い遠いポーランド人が有名になったお話を聞かせてみたいものだ。
(くまがい・けいこ)

ポーランド&ニッポン歳時記 33

夏の日曜日ショパン・コンサート

子どもの頃初めて書いた短編の一つは、ワルシャワのワジェンキ公園で行われていた夏のショパン・コンサートの印象についてで、当日のピアニストは青いドレスを着た日本人女性でした。そのコンサートは私にとって日本との最初の接触でした。今年の夏休み、日曜日にワジェンキ公園へコンサートを聞きに出かけました。ショパンの銅像の下にピアノはなく、周囲に立てられたスピーカーからスタジオ収録の演奏が聞こえるだけでした。近い将来また普通のコンサートに戻れることを願うというアナウンスが流れていました。

w czasie pandemii スピーカに
wysokie dźwięki nikną 消える高音
w szumie głośnika パンデミア
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

burza codzienna 日々嵐
raz rano raz wieczorem 朝な夕なに
huczy za oknem うなる外
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

遠郭公武四郎の十勝越え
山崩れ河川決壊夏の乱
コロナ禍の吾ら
脳は痩せ肉体太る金魚かな
岩見沢市、霜田千代磨

訃報

細川真理子さん(元札幌こどもミュージカル育成会会長)7月8日、ご逝去(享年88)。心よりご冥福をお祈りします。



札幌こどもミュージカル育成会(1981-2015)を主宰、小中学生に踊りや歌を指導。アイヌ民族や平和を題材に、創作ミュージカルを作曲、東京、ポーランド、バチカンなどで上演。同会は11年に北海道功労賞を受賞。

ポーランドとの交流

アイヌ民族の「ユーカラ」を題材に「きつねのチャランケ」を創作、大成功を収めました。

また、ポーランドの民族学者がアイヌ民族の歌を収録した「蠟管」の音を元に「ピウスツキおじさんの“ろうかん”から出たおはなし」を作曲、大反響を呼び、札幌のテレビ局が報道しました。その縁でポーランド公演に招かれ、ポーランドとの交流が始まりました。



ヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日大使にお知らせしたところ「大変悲しいお知らせです。細川真理子様の他界で、日本ポーランド関係の中の一つの時代が終わったような感じでございます」とのメールをいただきました。(安藤厚)

=写真=ふりっぱー西版 2014/5 より

2020年秋のイベント

《第34回定例総会》& 国立民族合唱舞踊団「シロンスク」オンライン公演、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2020年11月21日(土)13:30～

ご寄付ありがとうございます(敬称略、順不同)

(2020.5-8、1口千円)(6)尾形芳秀(2)小山内道子
(1)石田レイ子、中條峰人

新年度(2020.9-2021.8)会費納入のお願い

年会費(一般3,000円、学生1,500円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会
または

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座]

[店番号]028[口座番号]0605084

[名義]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚

※ご請求額は個別の納入お願い文をご覧ください。
郵便振替用紙を同封します。

※遠方の方は POLE 定期購読(寄付 1,000 円/年)
も可能です。事務局にお問合せください。

POLE101 目次

自宅でご覧になれるポーランド民族文化(ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」)..... 1
『POLE』百号に寄せて(小笠原正明)..... 1
ウイルスに負けない「ウヅジ市日本語スピーチ大会」の試み(吉田勝一)..... 2
《第95回例会》二風谷アイヌ文化博物館移動展 in 札幌を終えて(新井藤子、先川信一郎)..... 4
ウポポイ(民族共生象徴空間)開業・プロニスワフ・ピウスツキ記念像の再披露(安藤厚)..... 5
《新刊紹介》1『ポーランド・ポズナンの少女たち』田村和子;スプリスガルト友美著
(協明子、スプリスガルト友美)..... 6
『サガレン～樺太/サハリン 境界を旅する』梯久美子著(田原佑子、菅原三栄子)..... 7
《『熱源』の風をうけて》千徳太郎治の生涯(本田和義)..... 8
《新刊紹介》2『日本・ポーランド関係史 1904～1945』エヴァ・パワシュニルトコフスカ;アンジェイ・
タデウシュ・ロメル著(増補改訂版)(尾形芳秀)..... 10
『遠い遠い東の国で有名になったプロニシ・ピウスツキ』カタジナ・ノヴァク文;パウリナ・パジジェラ絵
(熊谷敬子)..... 11
ポーランド&ニッポン歳時記 33(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)..... 11
訃報 細川真理子さんご逝去(安藤厚)..... 12

発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方

電話・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com

東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付

電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会

氏間多伊子/熊谷敬子/塚本智宏
/松山敏/ラファウ・ジェブカ

POLE No.101 (September 2020)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Polska kultura ludowa już niebawem zagości w japońskich domach (Zespół Pieśni i Tańca „Śląsk” im. Stanisława Hadyny)	1
Celebrating the 100th issue of the newsletter "POLE" (M. Ogasawara)	1
Attempt of "Łódź Japanese Speech Contest" that is not defeated by coronavirus (M. Yoshida)	2
Report of the Nibutani Ainu Culture Museum Special exhibition on B. Piłsudski in Sapporo (F. Arai and S. Sakikawa)	4
Opening of the National Ainu Museum & Park “Upopoy” and B. Pilsudski Memorial Statue (A. Ando)	5
(New Books) “Girls in Poznań, Poland” by Kazuko Tamura and Splisgart Tomomi (A. Waki and T. Splisgart)	6
“Saghalien-Karafuto: Traveling Sakhalin along the border” by Kumiko Kakehashi (Y. Tahara and M. Sugawara)	7
The life of Karafuto Ainu Tarouji Sentoku (K. Honda)	8
(New Books) “Historia stosunków polsko-japońskich: 1904-1945”, supplemental revised edition by Ewa Pałasz-Rutkowska and Andrzej Tadeusz Romer (Y. Ogata)	10
“Broniś Piłsudski, czyli o tym, jak zostać sławnym na Dalekim Wschodzie” by Katarzyna Nowak and Paulina Paździera (picture) (K. Kumagai)	11
Haiku Yearbook: Poland & Japan 33 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda)	11
Mariko Hosokawa passed away (A. Ando)	12